

本日の学び テーマ：「パンのしるし」 テキスト：ヨハネ6章1節-15節

【理解の手がかりとして】

ベトザタの池での病人の癒しの後、父なる神とご自身との関係について語られたイエス様は、その後ガリラヤ湖の向こう岸に渡られた。つい先ほどまでユダヤ人指導者たちとの激しい論争が行われており、しばしの休息を求めての移動であったと考えられる（マルコ 6:31）。

しかしイエス様の癒しの業（奇跡）を目の当たりにして大勢の人々がその後を追ったのであった。マルコ福音書の記述によれば「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ」（6:34）とあるように、ここに集まってきた群衆は、単なる物見遊山の人々ではなく、心身の癒しを求めて主イエスのもとにすがって来た人々であったと思われる。「『群衆』という人間はない。皆、一人一人なのだ」とある人が書いていた。その通り、ここにいる五千人（いや、女性や子どもの数を数えると数万人）には、その一人一人の人生とそれぞれの願い求めがある。そしてイエス様は、その一人一人に「食べ物（命のパン）」をお与えになるために来られた（ヨハネ 6:35）。

しかしそのイエス様の憐みの心を弟子たちはどれだけ理解できていただろうか。彼らにとってそれは慰安のための「向こう岸」（6:1）。彼らもまた「食事をする暇もなかった」（マルコ 6:31）ほど働き疲れていた。しかしイエス様ご自身の疲れはそれ以上であっただろう。けれどもイエス様の憐みは留まらない。弟子の一人であるフィリポにこう尋ねられた。「この人たちに食べさせるのには、どこでパンを買えばよいだろうか」（6:5）と。

イエス様の問いかけは、他の箇所を見ても思うことだが、問われる者の信仰の器量が量られるものが多い。イエス様ご自身はこの後の計画をお持ちである。そこには十分なパンがないことも、パン五つと魚二匹しかないことも知っておられる。しかしそれでも問われる。「フィリポ、あなたはこのような状況で何を思

うか？」と。そしてこの問いはアンデレにも同様に向けられている。アンデレはフィリポの立場を援助しようと思っただろうか、こう言った。「こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」(6:9) と。

「二百デナリオン」とは一デナリオンが一日の賃金と考えれば相当な高価。それに比べて一人の少年の持つ「パン五つと魚二匹」は何と小さいことか。「これしかない」と考えるは人間の常。しかしイエス様は、その人間の小さき現実を、大いなる奇跡で覆しなされる。

10 節の「イエスは、『人々を座らせなさい』と言われた。そこには草がたくさん生えていた」とは、有名な詩編 23 編「主は羊飼い、わたしには何も欠けることない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」(23:1-3) を想起させる情景である。まさにイエス様は「良い羊飼い」(ヨハネ 10:11) として、その 5 千人 (数万人) の群衆、いやその一人一人の命の渴望、魂の飢え乾きを満たそうとなされるのである。

この「パン五つと魚二匹」の奇跡は最も有名なものの一つで、子どもの頃はただただその不思議をおとぎ話のように驚き、思春期は合理的な解釈 (たとえば、少年の差し出した行為に触発されて皆が持参した弁当を分かち合った等) をもって納得しようとした。

しかし今、大人になってあらためてこれを読む時に、それは「真実」であると思わざるを得ない。この世界に広がるキリスト信仰を見る時にもそうである。まさに辺境のガリラヤから始まった福音宣教、「パン五つと魚二匹」という小さな現実から始まった宣教が、今や世界中の人々の魂の慰めとなっている事実がある。また私たち一人一人の信仰体験の節々に、同様な奇跡 (無から有を造り出される主の御業) を数えることができる。私たちは、主の憐みの内に、「必要な糧」(マタイ 6:11) で養われてきたのである。

さて、11 節の記述は、月ごとの主の晩餐式を想起させる一文である。4 節に「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」とあるように、まさにイエス様は、このガリラヤ湖岸の原っぱでもって、過越しの食事 (救いの想起・信仰の刷新) を実施なさったかのようなのである。そこには人を隔てる垣根もない。皆が等し

くその恵みにあずかれる。「新しい神殿」がここにある。——「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ」(4:23 ※前課の学び)。

また、そのパンと魚は、そこに集まった人々の腹を満たすためだけのものではなかったことにも注目したい。残ったパン屑を集めると、その数12の籠一杯になったという。「12」とはイスラエル12部族を意味すると教わってきた。これは、イエス様の御子としての派遣が、まずは全イスラエル民族の救いのためである(マルコ7:27)、ということの意味が込められていると思うが、もっと言えば、それはイスラエル民族の枠を超えた全世界的な広がり・射程を持つ象徴的な数字と理解する。

この奇跡は、全世界の民を救おうとなさる主なる神様の大きいなご計画の予兆なのである。ただそれは予兆であって、この後の「十字架と復活」という最大の奇跡を押しつけるものであってはならない。そしてその時はまだ少し先のこと。ゆえにイエス様は「ひとりでまた山に退かれた」(6:15)のである。

※補足 「パン五つと魚二匹」の解釈として、「モーセ五書と預言書と諸書」を表す解釈がある。すなわちそれは「(旧約)聖書」をもってイスラエルが完全に満腹する(救いが成し遂げられる)ことを意味する。そしてそれを成し遂げるのは他でもないキリスト・イエスなのだ、という解釈。——「女が言った。『わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。』イエスは言われた。『それは、あなたと話をしているこのわたしである。』」(4:25-26)

『聖書教育』より

「神の子の『しるし』とは、説明されたからといって理解できるものではなく、ただ信じ受け入れる信仰の事柄といえます。」(聖書の学び～信仰の事柄として)

「自分の計算を越えて、イエスさまの言葉に従い一歩踏み出し、行動を起こしたことはあるでしょうか？
どのようなことが生み出され、あなたのイエスさまに対する信仰理解に変化がもたらされたでしょうか？」

(大人クラス)